

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『新版 財務3表一体理解法』

國貞克則 著 | 朝日新聞出版、2021、251pp.

本書は、2007年の初版から2016年に改訂され大部になったため、今回の3度目の改訂で、前半部分の基礎編(本書)と、後半部分の発展編(『新版 財務3表一体理解法 発展編』)の二冊に分かれた。

本書は、いわゆる会計の入門書ではあるが、以下の二点において一般的な入門書と異なる。第一に、企業の個々の取引を一つ一つインプットである簿記処理・仕訳から学ぶ一般的な入門書と異なり、各取引について直接的にアウトプットである財務諸表のつながりを明らかにしながら、いわば木と木のつながりを会計の森全体を見ながら理解する内容となっている。第二に、貸借対照表と損益計算書の2つの計算書を中心に学ぶ一般的な入門書と異なり、それらに加えてキャッシュフロー計算書も含めて、各取引が3つの計算書においてどのように計上されるのかを意識して学ぶ内容となっている。

本書は、第1章において、会計の全体像と財務3表(貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書)の基礎について解説している。その上で、第2章において、各取引が財務3表にどのように反映されるかについて具体的に解説している。最後に、株主資本等変動計算書や、財務分析への足掛かりとしての財務3表の読み解き方について簡単な解説を加えている。

なお、本書で会計の基本的仕組みを理解したら、続いて、姉妹書『新版 財務3表一体図解分析法』で財務分析の基礎を学び、さらに冒頭で紹介した発展編へと読み進めていくことを是非お薦めしたい。

評／『彦根論叢』編集委員／可児島達夫

『「利他」とは何か』

伊藤亜紗 編著、中島岳志・若松英輔・國分功一郎・磯崎憲一郎 共著 | 集英社、2021、220pp.

近年、世界のいくつかの国で自国第一主義の台頭がみられた中で、昨年からの世界中での新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大は、「利己」主義が台頭してきた状況下において、皮肉にも人類が「利他」について考える好機を与えられている状況になっているとも思われる。

「利他」は他者の利となることを為すことを意味するので、「利己」の対義語と思われるがちであるが、おそらく本来の「利他」ではないと思われる「利己的な利他」も考えられるので実は決して「利己」の対義語ではない。

本書は、東京工業大学の「未来の人類研究センター」の研究グループ「利他プロジェクト」の研究成果の一部であり、「利他」について前述のような議論から始まり、美学、政治学、仏教学、哲学および文学といったさまざまな分野から、異なるアプローチによる「利他」についての議論が展開されている。決して最終的に集約的な結論が明らかにされているわけではないが、全体を通して読み終えると不思議と「利他」とは何かについての共通の概念が見えてくるのがとても興味深い。

「利他」には、他者に対する信頼、余白、間(ま)、沈黙といった要素が重要であり、その行為の中には当事者以外の力、例えば、仏教における業(ごう)のようなものが存在し、互いに想定外の可能性が生成されるのではないかといった議論が展開される。「利他」とは何かについて考える入り口としては最適一冊である。

評／『彦根論叢』編集委員／可児島達夫

